

地盤沈下予測のスペシャリスト編

[登壇者] 小林 正樹

小林ソフト化研究所(株) 代表取締役所長

関西国際空港建設プロジェクトにおいて、現場の技術者とともに綿密な土質解析を行い大活躍された小林正樹さん。「不真面目になれ!」と語る小林さんが培ってきた35年間の研究生活で、いったいどのような経験をされてきたのだろうか。技術者としての真髓を探る!

真面目とは言えない学生時代：麻雀に熱中!

今や沈下解析で名高い小林さんは、決して真面目とは言えない学生だったそうだ。学生寮に入り、来る日も来る日も寮の仲間と過ごした。「同級生にはものをよく知っている仲間が多かった。大学とは、先生に教えてもらうのではなく、読書などをして自分で勉強をする場だ」ということを学んだそうだ。仲間の刺激を受けた結果、人のためになり、かつ幅広いことをやりたいと思ひ、土木を専攻。その後建設現場のインターンシップの経験から、「ものを現場でつくるのも良いが、全体を俯瞰して土木に携わりたい」と思ひ、役人の道を目指した。

本当は、研究所ではなく行政に携わりたかった 社会人1年目

入省当初、小林さんは行政の仕事を希望しており、同期の全員が研究所の志望ではなかった。運命のいたずらなのか、小林さんは技術研究所に配属。追

打ちをかけるように、大学の研究とも異なる土質分野の担当となった。「最初の半年間は本当にやる気が起きなかった」と小林さんは語る。では、いったい何をきっかけに目覚めたのだろうか。

当時の試験装置と言え、荷重を電氣的に変換して検出するロードセルもなかったため、試験のダイヤルゲージの結果を目視で2分ごとに記録し続けるという、非常に大変な思いをして研究にあたりだそう。なんとか自動で測定できないだろうか、と自問したことが転機を迎える始まりである。理解ある上司にも恵まれ、予算もつき、自動計測機の作製に挑戦しながら、三軸試験の応力制御プログラムの構築に明け暮れた。自分が携わっていることが現場と密接に関係する分野であるという、試験に没頭する生活の中で芽生えた自覚が、世界の最先端に位置していることへの自負であった。研究にどんなのめり込み、新しいものに取り組んでいくうちにあつという間に2年目となった。当時は余裕もあつたためアルバイトを雇うことができ、考えることだけに集中できたのだ。このように研究にのめり込む性格が自分にあることを学生時代には気付かなかつたという。「気が

ついたら、行政に行きたいとは思わなくなっていた」と小林さんは語る。

大変だったこと、それはなんと研究ができない入院生活

「大変だったことは、研究ができなかつた入院生活である」と語られ、私たちは度肝を抜かれた。研究内容で苦労したことよりも、研究に携われない期間を大変だった、と語られたのだ。

研究所に所属されて4年目、肝臓の病で6ヶ月の入院生活を経験。小林さんが26歳のときだった。実験で用いられていた水銀の蒸気を吸ってしまったのだ。当初は1ヶ月間と聞いていた。しかし、待てど暮らせど退院できない日々が続いた。自分の研究が気になり、見舞いに來てくれる同僚とは病室でも必ず打ち合



写真1 若手時代のお話をされる小林正樹氏



写真2 取材風景

こばやし・まさきさん

1944年、北海道生まれ。東京大学工学部土木工学科卒業後、旧運輸省に入省。港湾技術研究所土質部を経て、同研究所の所長、(財)沿岸開発技術研究センター審議役を歴任。2000年、小林ソフト化研究所(株)を設立、現在に至る。

わせをした。それだけでは足りず、入院生活3〜4ヶ月目には研究仲間を迎えに来てもらい、研究所と病院の往復を繰り返した。小林さんを見ると、心の底から研究がやりたくてたまらない、という情熱を持った姿勢があつてこそそのものだと感じた。技術者として、世の中の求めに精一杯応えるという姿勢を、小林さんはわずか4年目にして成し得ていたのだ。

ところで、なぜ退院できたのかと聞く
と、それは「気の持ちよう」だと言う。
しばらくたつても改善しない病状に納得がいらず、看護師長に口答えをした。他の入院患者からほめられて病院の会議室で宴会をし、「薬なんて効かないから、半分は捨てろ」という助言を受け、急に気が楽になり、6ヶ月目にはこつと良くなったのだ。入院生活以降、何があつても驚かなくなつたと語る。

晩
待望されていた
関空プロジェクト

小林さんは、関空プロジェクトにおいて地盤技術のサポートに大きくかかわつた。関空プロジェクトでは、地盤調査が必要にも関わらず、漁業補償の兼ね合いで行政的な理由により建設場所は沖合に決定された。まずは沈下予測をしないと工事の予算が決まらない。沈下1mで

200億円もの額が変わるためだ。小林さんはまず、試験工区を設け盛り土をする事で沈下の程度を確認した。研究の世界では結果を論文にして完了となるが、実務ではそうはいかない。結果を信じるのではなく、実測値を説明できるようにして実務への橋渡しをするのが小林さんの役目だ。現段階で、完璧なシミュレーションモデルの構築は不可能である。そこで定数を検討し、合理的な沈下解析結果が得られるようにした。困難をきわめるプログラムの作成も、地元住民が関空を待ち望んでいたからかもしれない。

晩
不真面目にしろ！

学会論文集のハードルを下げたほうが良いとも語る。査読は、落とすためではなく、捨つためであつたほうがよい。「先生の言うことには表面は従つて、自由に自分のできる範囲でできることをやる。結果として先生にとつても役に立つ。真面目すぎると苦労する」と小林さんは語る。これまで、学校では「真面目」でなければいけないと学んできた。しかし、言われたことを言われた通りにやるのではなく、自分の頭で考えた自由な発想のもとで行動に移すことにより、自分の力になり、面白くなるのだろう。そういったことが小林さんの「不真面目になれ」という言葉の裏にある真意だと思つた。

晩
取材を終えて

自由を大切にしている小林さんは、自分の興味と仕事を一致させているような印象を受けた。そもそも研究所の志望ではないにもかかわらず、プログラミングも始めてみると面白いもので、とことん突き詰めて考えるという小林さんの性格に合っていたそうだ。やりたいことができない環境でも、まずはがむしやらにやってみることが大切だと感じた。「当時の面接官は私の性格をよく見抜いた」と小林さんは語つたが、きつと小林さん自身で切り開いた性格なのかもしれない。私たちも単に希望を叫ぶのではなく、まずは与えられた環境でやり抜いていきたいと思つた。

学生編集委員 篠崎 真澄、澤村 康生

今月のスゴい技術者からの一言

不真面目になれ！

「不真面目になれ！表面上は真面目にして、裏では自分のやりたいように自由にやる。それが結果として良くなる。やらなければならないことは最低限でいいという感覚が技術者として成長するための一番の秘訣だ。」